

## 〔浜松ホストライオンズクラブ会長賞〕

遠野物語から考える心の豊かさ

浜松市立三方原中学校 三年 中村 圭

「まんま、昔話の世界だね。」

「うん。何が出てきてもおかしくない感じの所だね。」

そこは、昔話の世界の情景が広がる不思議な感じの場所でした。数年前、母と一緒に東北を旅する機会があり、その時に遠野市に立ち寄りました。座敷わらしやかっぱの話は当時も知っていたので、興味津々で訪ねたのをよく覚えています。遠野物語の舞台である遠野は、岩手県の内陸部に位置します。冬は凍えるような寒さ、過去には飢饉にも襲われ、生活するのには厳しい環境にある土地です。そこに住む人々の生活の逸話や伝承を、この地出身の佐々木喜善から柳田国男が聞き、まとめた本が、遠野物語です。その話の内容は多様ですが、共通する部分は、話に登場する舞台の多くが実在する土地、実在した人でありながら、妖怪や神様、死者と話の中で接点を持つ、もしくは、そのような不思議な存在に自らがなってしまう、現実と異世界が混ぜられたような、不思議な話ばかりという点です。そして、その話の結末は、もの悲しく、切ない話が多く、人間の本質、性が顕で、生きる上で大切な教訓が話の核心にあり、惹き付けられます。

集められたたくさんのお話の中で、私が特に印象に残った話は、十五話のオクナイサマです。この話は物語の中で珍しく和やかな話で、可愛らしい神様の話です。毎日、田んぼ仕事に精を出す家に、ある日見知らぬ男の子が突然に現れ、日暮れまで仕事を手伝って帰って行きます。泥だ

らけの足跡をたどっていくと、安倍家に祭られているオクナイサマだったというお話です。この話だけでなく、オクナイサマはあちらこちらに現れて火事を消してくれたり、急な雨の時に乾物を取り込んでくれたりして人を支えています。遠野では、このオクナイサマに限らず、神様との距離が近く、生活の中で、厚い信仰として根付いています。それは、「信じよう」とする、温かな心が幸せに繋がると知っているからだと思えます。また、違う側面では、何かを信じなければ、生きていけない辛さや、厳しさもあるのではないかとも思います。厳しい自然と共存する知恵は、信仰という形で根付き、恩恵に感謝し暮らす幸せを遠野の人たちに与えています。

他にも遠野物語には、興味深いお話がたくさんあります。無欲な女の人が踏採りで近くの小川沿いから、谷奥の知らない立派な家に迷い込んだ後、そのまま家に帰ると谷奥からお椀が流れてきます。そのお椀で穀物を量るといつまでも穀物が尽きず、豊かな暮らしを送れる家になったマヨイガ。孫左衛門の家の下男が、家に長く住む蛇を酷い目に合わせ、家にいた座敷わらしは他の家に行くと言い残し去った後、急速に没落した孫左衛門の座敷わらし。

お話は様々ですが、根底にあるのは、自然への感謝と異敬の念で、丁寧に真面目に暮らして生きていく尊さではないかと思えます。

遠野を訪れた時、驚いたのは、コンビニやスーパー等の数の少なさ、それに伴う看板類や標示の少なさでした。(不便では?)と思いましたが、便利さに慣れすぎている自分に気付きました。道の途中で土地の方とお話をしても、何も不便を感じている様子はありませんでした。多少の不便さや、土地の厳しさからの忍耐強さがあるからこそ、心の豊かさという大きな褒美がある気がしました。

今、ごみ問題や地球温暖化等、様々な形で噴出してきている環境破壊

は、私たちが便利さを求めた、その代償です。「便利」だから「必要」と、私たちは今まで、錯覚してきたのではないでしょうか。便利でも、本当に必要とは限らないのではないかと、根本から見直すことが求められている気がします。

便利さと豊かさは必ずしもイコールではなく、豊かに暮らすのは、心の持ち方次第で、どんな時でも、どこにいても、豊かに暮らせると物語は教えてくれています。

孫左衛門の屋敷跡の井戸と墓を訪ねた時、井戸と墓は田んぼの中にひっそりと朽ち、春を告げる福寿草が墓石周りにたくさん咲いていました。田んぼには邪魔になるであろう井戸や墓も、人の都合で撤去や移設はせず、地元の方が弔い守られていました。共存することの条件があるとすれば、対象への畏怖や敬いかもしれないと、探訪の体験から改めて、感じています。

徹しさを含めたありのままを受け入れ、覚悟して共存していく。身勝手な便利さを求めず、自然に寄りそい、その恩恵に感謝する。物語から学んだ、自然との共存と調和、豊かさの価値と意味を教訓にして、今後の暮らしに活かしていきたいと思います。

書名 口語訳 遠野物語

著者名 柳田 国男

発行所 河出書房新社